

第6回畜産企画部会（8月9日）における意見の概要

今後の主要論点	主な意見
1 我が国における大家畜畜産の位置づけ	
<p>2 「担い手」により、畜産物生産が担われ、これにより我が国畜産業の国際競争力の強化が図られるための施策の在り方</p> <p>(1) 「担い手」として明確化すべき経営形態の考え方</p>	<p>「担い手」問題については、畜産においては相当程度構造改革が進んでおり、生産の大宗が「担い手」によって担われる構造となっている実態を踏まえて議論すべき。</p> <p>酪農、肥育、繁殖ごとの特性を踏まえた「担い手」像を明らかにするとともに、これらの「担い手」によって畜産経営の大宗が担われる姿を明らかにすることが必要。</p> <p>繁殖経営は、小規模経営が担っているが、仮に、経営安定対策の対象を「担い手」に絞り込んだ場合、生産が大きく落ち込むことが懸念される。</p> <p>繁殖経営などについては、耕種との複合経営がほとんどであることから、畜産の「担い手」については、複合先も含めた経営全体として捉えるべき。</p> <p>我が国畜産の生産基盤（生産量、飼養頭数）は酪農、肉用牛経営ともに減少傾向にあるが、その中で、生産基盤の維持について、どう考えるのかとの視点を明らかにした上で、これと併せて担い手問題を議論すべきではないか。</p>
<p>(2) 畜産における「サービス事業体」の位置付けについての考え方</p>	
<p>(3) 経営安定のための施策の在り方</p>	<p>経営安定対策としては、いわゆるゲタ、ナラシだけでなく、融資、税制、経営継承など幅広く捉え、総合的な経営体質強化策を検討すべき。</p>
<p>(4) 人材の育成・確保の在り方（新規就農、女性、高齢者）</p>	<p>畜産経営における女性は縁の下の力持ちであったが、これからは、もっと表に出ていくことが重要であり、そのための研修等の場が必要ではないか。</p> <p>繁殖経営などは高齢者が担っている経営が多いが、畜産こそ高齢者の力をより必要とする分野であることを強力に位置づけていくことが必要ではないか。</p>

今後の主要論点	主な意見
<p>3 国際化に対応し得る産業構造の確立に資する政策体系の構築</p> <p>(1) 生産段階におけるコスト低減や省力化の推進など経営体質強化のための施策等の在り方</p> <p>(2) 畜産物の製造・流通・販売コストの低減・合理化のための施策等の在り方</p> <p>(3) 消費者ニーズに対応した生産・供給の在り方</p>	<p>乳用種牛肉を輸入品に対抗しうる重要な国産牛肉として位置付け、表示の在り方も含めた需要拡大を図るべきではないか。</p> <p>脱脂粉乳の過剰在庫についての位置付けの検討を進めるべき。</p> <p>輸出促進対策についての位置付けの検討を進めるべき。</p> <p>地理的表示についての位置付けの検討を進めるべき。</p>
<p>4 畜産物の安全・安心の確保に向けての施策等の在り方と消費者の視点に立った的確な情報提供の在り方</p> <p>(1) 畜産物の安全・安心の確保に向けての施策等の在り方</p> <p>(2) 消費者の視点に立った的確な情報提供の在り方</p>	<p>生産から消費までのリスク管理の徹底についての位置付けの検討を進めるべき。</p> <p>輸入飼料だけでなく、生産資材全般の安全性確保について検討すべき。</p> <p>生産者へのリスクコミュニケーションについての位置付けの検討を進めるべき。</p>

今後の主要論点	主な意見
<p>5 飼料基盤に立脚した畜産経営の育成のための施策の在り方</p> <p>(1) <u>自給飼料生産基盤の拡大と大家畜経営における自給飼料生産拡大の在り方</u></p>	<p>飼料基盤に立脚した経営における健康な家畜から生産される畜産物が、安心・安全な国産畜産物と言われると、これまで大規模化を指向してきた酪農経営は対応できなくなる。飼料基盤に立脚した大家畜畜産経営と規模拡大による低コスト経営は、土地や環境問題の制約もあって、両立を追求することは、難しいのではないか。</p> <p>飼料基盤に立脚した経営を実現するための理念を確立するためには、飼料施策として独自の方向を打ち出すことが求められているのではないか。</p> <p>自給飼料生産に当たっては、土地利用調整や放牧に利用する共有地の確保の在り方についても検討すべきではないか。</p>
<p>(2) <u>飼料生産とたい肥還元のための耕畜連携の施策の在り方</u></p>	<p>稲ホールクroppサイレージは、酪農家にも高く評価されており、さらに推進すべき。</p>
<p>(3) <u>多様な大家畜畜産経営の展開と存立基盤の整備の在り方</u></p>	<p>公共牧場の今後の役割を明らかにすべきではないか。日本型放牧についての位置付けの検討を進めるべき。</p>
<p>6 <u>流通飼料の安定的な供給を図るための施策の在り方</u></p>	<p>流通飼料の合理化についての位置付けの検討を進めるべき。</p>
<p>7 <u>家畜排せつ物の適切な処理利用</u></p>	<p>畜産物生産が環境に及ぼす負荷の問題について、クロスコンプライアンスや汚染者負担原則の在り方も含め、政策上どう位置付けるのかについて議論が必要。</p> <p>家畜排せつ物から作られるたい肥は、耕種農家にとって使い易いものであることが必要ではないか。</p>
<p>8 家畜の能力向上と新技術の普及・定着を図るための施策の在り方</p>	<p>多様な食生活を前提として、消費者ニーズが何であるかについて明らかにする必要。例えば、牛肉であればサシなのか赤身なのか、牛乳であれば乳脂肪なのか乳タンパクなのかによって、肥育期間や家畜改良の方向が異なってくる。</p>
<p>9 その他</p>	<p>畜産経営や流通・販売部門が目標とすべき飼養頭数やコストの目標を数値で位置付けるべき。</p>